



サケはなぜ卵を産むと死ぬの

サケは、卵を産むためにだけ川へ帰ってくる

サケは、海で大きく成長します。北の海で、3～5年すごして、ほかの魚やイカなどをとらえて食べ、体長が80センチメートルぐらいまで大きくなったら、生まれた川を探して、卵を産みに帰ってきます。

川に入ったサケは、いっさいえさを食べなくなります。ただひたすら、川の流れに逆らって、必死で卵を産める場所まで、泳ぎ上がってきます。川の中流から上流へたどり着くと、メスとオスはおたがいに相手を見つけ、メスがおひれを使って、川底に穴をほります。そして、やっと卵を産み終わると、うろこもしっぽもぼろぼろになり、何日もえさも食べていないので、力がついて、メスもオスも死んでしまいます。

サケは海で大きくなる

卵は、およそ60日くらいでかえり、おなかに大きな卵黄をつけたサケの赤ちゃんがふ化します。まだ、自分で泳いでえさをとることはできませんので、石の下などにかくれ、おなかの卵黄の栄養分で育っていきます。およそ50日後に、おなかの卵黄がなくなったサケの子魚は、石の下から出て、水生こん虫の幼虫などのえさを食べはじめます。

春の間、川で体長が5～7センチメートルになるまで育ったサケの子どもは、体の色も銀色になり、川を下って海に旅立ちます。卵を産みに川へもどってくるのは、サケの一生の終わりのときなのです。（監修・安部 義孝）

